



「未来からの問い」特設 HP／公開対談「新型コロナウイルス後の世界」

(敬称略・対談者五十音順)

	対談者	主催者	頁
新型コロナウイルスに対する国際学術社会の連携	秋葉 澄伯	武内 和彦	299
生け花に学ぶ想定外を楽しむ精神	池坊 専好	渡辺 美代子	302
歴史に学ぶ感染症と人類・環境の関わり	井野瀬 久美恵	渡辺 美代子	309
日独比較に見る新型コロナウイルス後の世界	イリス・ヴィーツォレック	渡辺 美代子	316
新型コロナウイルスとSDGs	沖 大幹	渡辺 美代子	323
「ステイホーム」が示す「ライフ優先社会」	落合 恵美子	三成 美保	329
持続可能な野生動物の管理システム	梶 光一	山極 壽一	335
コロナ後の産学連携のあり方	梶原 ゆみ子	山極 壽一	340
コロナ後の国際連携のあり方	モンテ・カセム	山極 壽一	347
新型コロナウイルス感染で顕在化したメンタルヘルスの課題	神尾 陽子	渡辺 美代子	352
新型コロナウイルス感染拡大が加速する情報通信社会	喜連川 優	渡辺 美代子	359
生物多様性から読み解く新型コロナウイルス後の世界	五箇 公一	武内 和彦	364

日本の未来と学術の役割	五神 真	山極 壽一	367
高校生が東日本大震災の経験をもとに考える未来	坂田 紀乃	渡辺 美代子	374
米国感染症対策・研究の仕組みと現状	塩田 佳代子	渡辺 美代子	379
日本の農業の課題と未来	澁澤 栄	山極 壽一	384
新型コロナウイルス後の地球環境政策	高村 ゆかり	武内 和彦	389
芸術活動と芸術教育が拓く日本の未来	平田 オリザ	山極 壽一	392
コロナに重なる自然災害に対処する	米田 雅子	山極 壽一	397

「新型コロナウイルスに対する国際学術社会の連携」2020/06/04 収録

対談者：秋葉 澄伯（日本学術会議会員、弘前大学特任教授、鹿児島大学名誉教授）

主催者：武内 和彦（日本学術会議副会長、公益財団法人地球環境戦略研究機関理事長、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授）

（以下敬称略）

武内 それでは今日は、感染症の予防・制御を目指した国際学術連携ということで、秋葉澄伯先生にお話を伺いたいと思います。秋葉先生は、この間、新型コロナウイルス感染症対策に対する学術的な貢献のために、さまざまな努力をされ、日本学術会議の幹事会声明（本年 3 月 6 日に公表されたものですが）の取りまとめにあたられ、その後もさまざまな対応についてご尽力してられました。まず、秋葉先生にこの間の対応状況についてお話を伺えればと思います。

秋葉 まず、幹事会声明についてお話をさせていただきます。3 月 6 日に発出されました、幹事会声明では、日本学術会議が国際学術会議、ISC やアジア学術会議との連携を深め、中国科学技術協会や米国科学アカデミーとの情報共有を進めて、世界の学術界における大規模感染症予防、制圧への国際的取り組みを進めることを国民の皆さまにお伝えしました。世界のグローバル化がコロナの流行を許し、社会格差の増大による住環境、衛生環境の悪化が流行を拡大させました。感染症は輪の最も弱いところを突いてきます。言い方を変えますと、公衆衛生や医療システムが脆弱な国、地域で流行が拡大します。従って、国際的な輪を強めることが重要です。そのためにも国際的な強力と情報共有は重要です。

わが国からの情報発信を増大するため、日本学術会議のホームページでポータルサイトを設置し、全都道府県の症例リストにリンクできるようにいたしました。このようなデータは自ら地域別の流行解析を行おうとする場合には必須な物であります。オープンサイエンスの促進を自ら実践した形と考えております。また、現在、第二部大規模感染症予防制圧検討分科会において、今後の感染症への備えとして、感染症へのレジリエンスを高めるためにどのような組織や体制が必要なのかなどについて、集中的な審議を進めております。その提言を英訳し、世界に情報発信する予定であります。

武内 日本学術会議が所属する世界の学術団体の一つに G サイエンス学術会議という組織があります。これは G7 加盟国の主要なアカデミーが参加する組織です。本年 3 月に全米科学アカデミーで開催が予定されていましたが、新型コロナウイルスの影響を受けて開催そのものが中止になりました。しかし、各アカデミーがいろいろと意見を出して、『新型コロナウイルス感染症の世界的流行にかかる国際協力の緊急的必要性』について共同声明を取りまとめ、4 月 8 日に公表したところでした。この声明については、日本学術会議も会長談話を公表いたしましたし、また、竹本直一内閣府特命担当大臣に共同声明をお渡しし、記者会見でも公表、紹介をしていただきました。

た。こうした取り組みについて、秋葉先生ご自身のかかわりも含めて、お話しいただければと思います。

秋葉

まず、G サイエンス学術会議の共同声明の概要についてご紹介いたします。声明では六つのポイントを挙げています。流行の疫学的データの国際的承認、特にウイルス学・臨床ウイルス学に関する科学的情報のリアルタイムな共有、予防・治療などの方策や、政策課題の分析での共同、医療機器の研究開発に関する情報共有と共同、必要な医療資源確保のための規制と生産過程の国際的な協力と調整、市民および政策担当者への一貫した科学的なガイダンス、情報発信、コミュニケーションへの共同開発であります。日本学術会議には3月中旬に全米科学アカデミーが作成した共同声明のドラフトが送られてまいりました。幹事会声明ではコロナ禍を奇禍として感染症へのレジリエンスを高めることが重要と指摘されておりますので、その趣旨の文言を共同声明ドラフトに追加いたしました。最終的な文面でもそれが強調されております。

武内

G サイエンス学術会議の共同声明の中でも強調されていましたが、世界140カ国以上のアカデミーが加盟するIAP、インターアカデミー・パートナーシップ・オブ・アカデミクス・オブ・サイエンスアンドメディシンというものがございます。これは開発途上国が数多く含まれているということで、大変大きな意義を持つわけですが、このIAPが『新型コロナウイルス感染症の世界的流行にかかる地球規模の結束に向けたIAPからの要請』というコミュニケをまとめております。その内容のご紹介と、それから日本学術会議の対応についてお話をいただければと思います。

秋葉

IAPは今、武内先生がご紹介されましたように、化学、工学、医学の分野での協力、共同を目指した世界各国のアカデミーの共同体であります。日本学術会議もメンバーの一員であります。IAPは本年の3月に新型コロナウイルス感染症の世界的流行にかかる地球規模の結束に向けたIAPからの要請というコミュニケを出しております。このコミュニケでIAPは人類にとって脅威となる伝染病は新型コロナウイルス感染症だけではないことを指摘し、今、最善のデータに基づいた政策やプログラムを可能にし、強調するための努力を再確認するために、この新型コロナウイルス感染症の世界的流行が広がるにつれて得られる経験から学ぶだけでなく、他の脅威への対応において、何がうまくいき、何がうまくいかなかったのかの教訓を生かしていかなければならないと述べ、さらに、公衆衛生の枠組みと保健医療制度が脆弱な国々、特に新型コロナウイルス感染がすぐに増えていくだろうと予想されるアフリカと東南アジアの国々への支援と連携に対する格別の努力を提唱しております。

最初にも触れましたが、コロナ禍でアフリカや東南アジアの一部の国では経済的に困窮する社会階層が拡大すると思われます。そのような階層は新たな感染症、多剤耐性菌を生み出す温床となり得ます。従って、支援が必要な国への援助、支援はグローバルな公衆衛生にとっても重要な意味を持っております。わが国の公衆衛生のレベルは世界のトップにあると言われております。その重要な基盤が母子保健であります。わが国の母子保健手帳を使った、母子保健制度は東南アジア、アフリカでも

導入されつつあります。インドのケララ州やイランなどのへの先進的な取り組みを参考にして、現地の状況に沿った支援を進めることが重要であるというふうに考えております。公衆衛生の向上に近道はありません。このような地道な作業を推進するためにも IAP、または世界最大の学術団体である国際学術会議、ISC の枠組みを使った国際協力、支援がコロナ禍でさらに重要となっているというふうに考えます。

武内

日本学術会議が加盟しているもう一つの組織として、Science 20、S20 というものがあります。これは 2017 年にドイツの科学アカデミー、レオボルディーナが提唱して始まったものです。このときのテーマは『世界の健康を改善する。伝染症、および非伝染性疾患と戦うための戦略と手段』で、当時から新型コロナウイルス感染症対策にも適用できるようなさまざまな提言が取りまとめられており、大変、先見の明があったと評価されております。また、本年はサウジアラビアが主催する S20 では『重大な転換へと導くための科学の展望』と題して四つのタスクフォースが設けられ、その一つが『健康の未来、福利の推進と個人の健康管理の拡大』となっております。日本学術会議も今年の S20 のホストアカデミーとして、このサウジアラビアが主催する S20 に積極的に関与しているわけですが、このことについてご紹介をいただければと思います。

秋葉

次の流行に備えるために重要なのは流行状況、予防、治療に関する情報の国際的共有であります。これから冬になるオーストラリア、南米、アフリカ南部での流行状況、また、中国、ヨーロッパでの第 2 波の流行に関する情報の収集が重要であります。武内先生がご紹介されましたように、今年の 9 月下旬にサウジアラビアの主催で S20 が開催されます。それまでには新型コロナウイルス感染症に関するわれわれの知識も大幅に増大していると思われます。新型コロナウイルスの感染力、感染経路がより明確になれば、よりの確に感染予防対策を講ずることができるようになります。各国の知見を持ち寄って議論することは次への対策としても大変重要であります。新型コロナウイルス感染症の制御にはワクチンが必要であり、ワクチンが開発されてもそれを安価に大量に生産するには自国に生産設備を持つ必要があります。これに関しても IAP が支援促進に役割を果たすべきと考えます。S20 のメンバー国のアカデミーはほとんど IAP に参加しております。今年の S20 で作成されるコミュニケは日本を含む G20 首脳、または科学技術政策担当大臣に渡され、新型コロナウイルス対策に関する、学術論でのガイドラインの一つとなる物と考えております。

武内

秋葉先生、今日はどうもありがとうございました。

秋葉

ありがとうございました。

「生け花に学ぶ想定外を楽しむ精神」2020/7/14 収録

対談者：池坊 専好（華道家元池坊 次期家元（学術博士））

主催者：渡辺 美代子（日本学術会議副会長、科学技術振興機構副理事）

（以下敬称略）

渡辺 今日、華道家元池坊の次期家元であります池坊専好さんをお招きいたしました。ご存じの方も多いと思いますが、最初に専好さんをご紹介します。専好さんは池坊家に生まれ京都で育ちになり、そして大学時代に京都を離れて東京で過ごされ、国文学を専攻されました。華道は中学の時から正式に始められたそうで、1989年に得度されました。ですので、専好さんは京都のお寺の副住職でもいらっしゃるのですね。そして池坊の次期46世になるそうですが、この家元継承者となられ、2015年に4代目の「専好」というお名前を襲名されました。池坊の歴史というのは550年以上だそうで非常に長いのですが、その中で女性の家元は初めてだそうです。

専好さんはシンガポールに住んでいらっしゃるご経験もあり、現在ではアイスランド共和国の名誉領事もされ、国際的にも大変ご活躍されています。また、学術博士でもいらっしゃいます。今日は、いろいろなところで活躍をされている専好さんに、私たちが経験した新型コロナウイルス感染、これで社会が大きく変わると言われていますが、この感染で変わる未来がどうなるかお話を伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

池坊 よろしく願いいたします。

渡辺 それでは最初に専好さんにお伺いします。コロナ感染で自粛が続き、私たちも活動が自由にできなかったのですが、生け花界は専好さんを中心にどのような状況だったのでしょうか。

池坊 はい。コロナの感染が拡大してから生け花界はほとんどの行事が中止、あるいは延期になりました。生け花を普及するために必要なことというのは花展を開くことですが、花展はたくさんの方に来ていただくことに意味があります。そしてまた、準備段階でも多くの方が集まって花を生けますから、どうしても密にならざるを得ない状況です。ですから、生け花展、講習会、それから海外派遣も中止になっています。それぞれの地域の先生がたのお教室もお休みですから、たぶんうちの流派だけではなくて生け花界全体として、この数カ月はほとんど活動ができなかったという、そういう状況だと思います。

渡辺 そのような中で、専好さんはどのように過ごされましたか。

池坊 この時期は、私にとってもいまだかつてないくらい家にいる時間の多い数カ月でした。通常、生け花展はあちこちで開催され、また講習会もあちこちであります。それに合わせて私も新幹線や飛行機に乗って移動していましたが、今回は家にいてまとまった時間がありました。通常ではどうしても大きな作品のお稽古は難しいのですが、例えばカキツバタ一色と言いますけれども、カキツバタだけをたくさん使って生ける立

花があります。そういうものはどうしても時間がかかるのでなかなかできないのですが、そういう普段できないお稽古を半日ばかり、1日ばかりで取り組んでいました。

渡辺

普段はできないことが、おうちに長くないければいけない状況でできたということで、多くの皆さんと同じだったということですね。このコロナ感染というのはとても社会を大きく変えてしまい、今もまた感染が広がっていて、終わりが見えない状況にあります。この大変な状況を専好さんはどのように捉えていらっしゃいますでしょうか。

池坊

そうですね、本当に価値観を変えざるを得ない、今までとは違ったことに気付かされた大きな気付きの時だったのではないかとと思っています。今まで生け花は、1対1で先生と生徒が向かい合って教えるを受けるというのが通常だったわけですが、それができない状況の中で違った方法で指導もできるのではないのかと考えました。また、今まで当たり前のように行っていた生け花展、あるいは講習会も、それが当たり前と思うのではなく、違った感覚で違った手法でできるのではないのかという、そういういろいろな可能性を逆に考える機会を与えてくれました。そのことによって生け花の伝達方法や、生け花の世界そのものが広がったのではないかなとも感じています。

渡辺

この大変なことが早く終わってほしいと願うだけではなく、この中で新たな生き方や生け花のやり方も考えていらっしゃるということですね。

池坊

早くワクチンができて、この感染が一日も早く終息することを願っていますが、それとともに、こういった非常事態は、これから違う形でも起こりうるかもしれないと考えています。今まで当たり前のように、何の疑問もなく前例がこうだったからとか、あるいはこうすべきだと思い込んでいたところに私は過ちがあるのではないかと考えます。むしろこういう非常事態の時こそもっとしなやかに、そして新たな手法を考え出し、違った可能性も生み出せるように思います。その意味では、非常事態の乗り切り方というのでしょうか、非常事態にあつて人はどう生きて、かつ伝統というものをいかにつないでいくのか、そういう私にとっては大きなテーマを考えざるを得ない、そして実際に考えた時間でもありました。

渡辺

しなやかに対応していくというお話がありましたが、専好さんは海外在住の経験もお持ちですし、パリで生け花展をされ、学術博士も持っています。たぶん、生け花の世界で博士を持っています方は少ないと思いますが、周囲がされない新しいことをいろいろされていますね。それはまさに今回、皆が必要としていることではないかと思いますので、専好さんが今までされてきたことは多くの方にとって参考になると思います。学術会議は多くの会員が博士を持っていますが、専好さんはどうして生け花の世界で生きていく中で博士を取ろうと、博士課程で勉強されようと考えられたのか、それについても教えていただいてよろしいでしょうか。

池坊

はい。大学院に行こうと思ったのは、池坊総務所に入職して仕事をしてから20年以上たってからのことです。ずっと花を生けている中で、生け花や生け花の普及について考えてきました。一つの場所にいるということは、それはそれで非常に恵まれたことではありますが、その中で凝り固まっていはいけなないと考えました。生け花には、もしかしたら私が考える以上にもっと広くて深い世界があつて、それを私は一つの方向

からしか見てないのではないかという、そういう自分の中の危機感のようなものを抱いたのです。

そういった時に、自分のいる世界の中からではなく、いったん外に出て中立的な立場で、あるいは全く違ったアプローチの仕方で生け花を知りたいという思いが強くなりました。博士課程の時は生け花の美しさはどういう基準で評価されるのか、その美の基準というのはどういう過程を経て人は習得していくのか、そういったことを研究いたしました。

渡辺 生け花というと、表面的にはどうも科学とはかけ離れているのではないかという印象を持つ方も多いと思いますが、今の専好さんのお話はそうではなく、生け花も科学的に見ることによって新たな価値が見いだされるとお考えになったということですね。

池坊 そうですね。どうしても伝統文化というと、今までやってきたやり方を踏襲しがちになりますが、生け花の様式やルールを見ていますと、実はそれがとても合理的にできています。その美しさというものがただ単に感覚的なものではなくて、あるいは先人がやってきたからというのではなくて、それは時代ごとの変遷もあるけれども、多くの方が見た時に納得するだけの何か根拠になるような普遍性がある、そういうところに接していると科学的なアプローチができるのではないかと思うようになりました。それで、私自身いろいろやってみました。そのことで明らかになったこともあります。でも、やってわかったことは、生け花の世界は本当に広くて、科学的に理解できたということも生け花のほんの一部であって、私はまだまだ生け花という大きな海の中で漂っている、そういう存在に過ぎないのだということがわかりました。

渡辺 ありがとうございます。生け花にも科学が貢献できるというのは私たちにとってとても嬉しいですが、それはまだ一部ということですね。逆に、私たち科学の世界も生け花から学ぶことはたくさんあると、実は思っております。

以前、京都の地方学術会議で対談させていただいた時に、専好さんにいろいろお話を伺いました。例えば、枯れていく美しさ、そういう美は普通、生け花以外の世界ではなかなかないように思います。古くなるもの、死に近づいていくものはだんだん価値がなくなっていくような、そういう印象を多くの方が持っていて、どの世界でもその感覚はあると思います。生け花はそうではないという考えを聞いて私はとても驚きました。そして、そこには新しい科学もあるのではないかと思います。枯れていく美しさについて、お話いただけますか。

池坊 15 世紀に池坊専応という人が「枯れた花にも花がある」という言葉を残しています。通常、私たちは、花というと一番盛りの時を花と捉えますが、生け花における花というのは、その盛りの時だけではなくて、つぼみであったり、枯れてしまう寸前であったり、あるいは枝としては枯れてしまったものであったり、その全てが命の一つの姿であると捉えるわけです。

ですから、こちらが良くてこちらには価値がないとか、こちらのほうが価値が高いということは、あくまで人間が経済的、商業的な価値観の中で決めているのであって、命そのものとして変わりはないわけです。表面的に見える美しさに着目するのではなくて、

どんな姿であろうとどんなステージであろうと、その中に脈々と命というものが流れている、命が息づいているということを見いだしたところに、生け花の特異性があり、それこそが生け花の象徴的な哲学です。

渡辺

今おっしゃったように、今までは一番いい時、満開の時が一番美しい花というような単純な評価をしてしまうことがいろいろな部分でありましたが、それほど単純ではないというお話をしていただきました。それに似た捉え方としては、数が少ないことも美しいというお話も以前お伺いしました。これもなかなか他では聞くことができないことです。私たちはコロナ感染を経験して、これから未来が変わっていくわけですが、今のようになる時こそこういう考え方がとても大事ですよ。

池坊

生け花が求めるのは、たくさんあることの美しさではないのです。乏しさの美しさなのです。私たちはついたくさんの花を使ってより華やかに、もちろんそれはそれで明るいしきれいですが、生け花では花と周りの空間を共に見ることによって私たちの想像力をかき立てるという考えなのです。そして、その想像力が足りない部分を補って、いろいろな想像によって豊かな世界ができるという見方をしているのです。ですから、そういった意味では私たちが何を見て、そしてそこから何を想像できるのか、どんな連想ができるのか、そこにはまさにその人が表れることになります。

今、コロナ感染が拡大している中で価値観を変えざるを得ない、今までとは違う生き方を私たちがしていかなざるを得ない中で、人間が持っている想像力や、人間が何か一つのものを見た時にそこから読み取る力であるとか、そういった人の秘めている力がとても大きな意味を持つことになります。それは、生け花文化でも、人が生きてくための社会活動でもこれから必要なことではないでしょうか。伝統文化は、大きなヒントを与えられるのではないかと感じます。

渡辺

本当に参考になります。例えば、生け花というどうしてもお花を中心に考えてしまいますが、今の専好さんのお話は周りの空間も一緒に考え、生け花の一部と捉えるというお話でした。対象を一つだけに絞って何かを追求するのではなくて、周りのものも大切にすることと通じますね。人間社会で、主対象とする人だけではなくてその周辺の人や、あるいは周りの環境、もっといろいろなものを一緒に考えることで真実が見えるのではないかという気がいたしました。

その観点からもう一つお伺いしたいのは、見えないものを見ますか、無形を感じ無形を信じるというお話もいただいたように思います。それも空間を大事にすることと通じるように思いますが、いかがでしょうか。

池坊

そうですね。先ほど、そのものだけではなくて周りにあるものともに考えていくという話が出ました。さらにそれを深めて言うならば、生け花では花、草木の前の段階も非常に重要なのです。と言いますのは、私たちが目にするものは草木の持っている今の環境です。でも、草木の姿は、素質としていろいろな要素を持ちながら、種から芽が出て、そこで風が吹いたり雨が降ったり、いろいろな影響を受けながら、それが、例えば曲がった姿になったり、あるいは上にすらっと伸びた姿になったりという目に見える形になっていくわけです。ですから、最初、草木を見た時に生け花人は、草木の姿

からその草木が一体どういう要素をもってどういう環境で育ってきたのかということ、まず読み取っていかなくてはならないのです。

それから、先ほど無形を信じるという話もありましたけれども、それは花を生ける人もそうだし見ていただく方もそうです。全体を感じ、捉えることが大切です。実際生けられた花の背景に何があるのか、その花を通して一体その人は何を表現したいと思っているのか、そしてその草木は一体どのような他の草木との関わりでこの作品の中に位置しているのか、そういうことを私たちは頭、目、自分の勘であったり、それから草木から発せられる香りであったり、頭も五感もフルに使いながら、そういう目に見えないものをどこまで感じ、捉えることができるか、それはとても重要なことです。そこに文化の面白さがあるのではないのでしょうか。

渡辺 とても広くて深いお話ですね。空間だけではなくて環境も、そして時間までも考える。今の時間だけではなくて、今に至る過去のことも、これからどうなっていくかという未来のことまで想定し、さらには生ける人も表れるという、本当に全ての要素を考えながら生け花をされるということを今のお話を聞いて理解いたしました。

池坊 こういった文化が日本の伝統としてあるということは重要ですし、またこれは何も一部のアーティストだけのものではないのです。本当に全国津々浦々皆さんが生け花を生けて、そして日々を豊かに彩ってきた生活文化として生け花があるという、その意味を私は大切にしたいと思います。

渡辺 私たち科学をする者も、身近にこういう貴重な文化があるということに実は気付いていないのですが、せっかく身近にあるなら一緒に追求していくと新たな価値が見えてくるかもしれないですね。こうやってお話できるのもとても嬉しく思います。

池坊 ありがとうございます。生け花は伝統文化であります、実はバイオテクノロジーなどの影響を受けているのですよ。今までなかったような色や品質を持った植物が出てくることもありますし、また、そういった植物が出てくることによって私たちの表現の幅が広がっていきます。明治時代の生け花と今の生け花を比べると使われている材料が全く違っています。ですから、生け花は伝統文化ではありながら、同じことを繰り返しているのではなくて、その時代ごとの環境の変化を受けたり、テクノロジーの影響があったり、人々の価値観の変化もあり、そういうさまざまなことを受けながら変わってきている、生き続けているそういう存在なのです。

渡辺 変化し続けているということ、それが重要かもしれないですね。科学も変化しているものですから、本当に一緒です。

専好さんに次にお伺いしたいことがあります。今日の対談は未来を考えることがテーマですが、今のこの状況、つまりコロナ感染が落ち着いた状況にありますが、これからの未来についてお話いただいてもよろしいでしょうか。

池坊 はい。どうしても対面式の稽古が難しいということで、Zoomなどのオンラインでの指導も一定の評価を得ています。通常はなかなか難しい状況で、例えば海外に住んでいて生け花を習いたいけれども習えないとか、子育て中でどうしてもお稽古に行けないとか、あるいは仕事や介護などで今まではやっていたのに生け花を中断せざるを得

ない、そういった様々な事情の方にもこういった方法ですと生け花を続けることができるということです。今まで途絶えていた縁というのを、こういったことで復活できるといった事例も増えてきました。

これからはこういった伝統文化の指導にも、実際に対面する昔からの方法と、それから今のバーチャルを使った方法があると私は思っています。何も一つが良くて一つが悪いのではなく、時代とともに生け花の姿も変わっていく中で、こういった二つの方法があることによって、より多くの方に生け花に興味を持ってもらうことができますし、生け花を経験できます。指導法も新しい段階に一步踏み込んだのではないかという気がしています。実は私、以前に花の器、花器を作ったことがあるのです。ごめんなさい、話が脱線しますが。

渡辺

いいえ、とても興味があります。

池坊

花の器というと陶器や銅器が多かったのですね。陶器や銅器ですと、重さがあるので高齢化社会に適合しにくい側面があります。そこで、FRP（繊維強化プラスチック）を使った器というのが増えてきました。ただ、FRP を使うだけではなくて、そこに京都の西陣織を入れ込み、西陣織の違った可能性を持って市場に出すことにしたのです。いつも感じるのは、伝統文化というと何か古いことだけをやっているようにも思われがちですが、今の最先端技術や新しい素材と非常に親和性があります。またお互いがお互いを補完する形で、新しい提案をこれからしていけるのではないと思っています。そういう可能性を秘めた関わり方こそが、これから大事なのではないかと考えています。

渡辺

いろいろな可能性がありますね。オンラインの話をされましたが、私たちと全く一緒だと思いながらお聞きしました。今まではシンポジウムやフォーラムなどは必ず集合して行っていましたが、それが今はできないので、会議もオンラインでほとんど行っています。当然ながら直接会ったほうが深い話ができるという面もありますが、少なくともやらないよりはるかによいです。

実際にオンラインをやってみたら、意外なよい面がありました。それは何かというと、地方の方がわざわざ会場に来なくても参加できますし、専好さんがおっしゃったことと全く同じで、子育て中の方が今までは参加できなかったのに、オンラインだったらそれこそお子さんを抱きながらでも参加することができ、すごくありがたいと言っていたきました。今までは、排除するつもりはなかったけれど、実質排除してしまったような人を今回は取り込めたということは、非常に意味のあることだと思っています。生け花も全く一緒ですね。

池坊

生け花も全く一緒に、多くの方がいろいろな制約や事情がある中で生活しています。より多くの方が参加できる、より多くの方と同じ時を分かち合える、そういった役目をオンラインが果たしてくれているのではないのでしょうか。

渡辺

そういう意味では、今までは一人の人間が職業は一つだけという方が多かったのですが、これからはもしかしたら一人の人間がいろいろなことをできるようになる、そういう機会を提供してくれる可能性もありますね。

池坊 そうですね。時間が非常に有効に使えるという利点もあると思います。

渡辺 ありがとうございます。専好さん、最後に若い方々へ、メッセージをお願いしてもよろしいでしょうか。

池坊 なかなか一言で言うのは難しいのですが、若い方には、自分はこののだとか、あるいはこういう道しかないのだと決めつけないでほしいと思います。つい人間は自分がその時に置かれている環境の中で、今までの自分の経験から物事を決めてしまいがちです。でも、周りをちょっと見ると実際は他の考え方もあり、別の生き方もあり、選択肢はいろいろあって、本当はより柔軟によりしなやかに人間は生きられるのではないかと思います。ですから、あまり自分で自分を規定しないで広い視野で捉え、その上で食欲なくらい自分自身を追求して自分の生き方を貫いて欲しいと思います。

渡辺 今、専好さんがおっしゃったことは、専好さんの生き方そのものではないかと思ってお聞きました。専好さんは華道家元池坊という伝統あるおうちに長女としてお生まれになって、背負うものが多いと思いますが、海外でご活躍され、学術博士も取られ、いろいろなことに挑戦されていらっしゃる。それは、背負うものを単に重く感じてしまったらたぶんできないことでしょうし、それはそれ、もちろん背負うけれど、むしろご自分は新しいことをどんどんやってみるという専好さんの生き方そのものではないのでしょうか。若い方にはぜひ専好さんのお書きになられた本やメッセージを、私はぜひ参考にして欲しいと思いました。

池坊 ありがとうございます。単に好奇心が旺盛なだけなので、いろいろなことに興味が出てきてしまうのです。自分が興味を持ったことを確認したい、もっと知りたいと思って首を突っ込んでいるような状況です。きっと人にはいろいろなチャンスもあるだろうし、ぜひ若い方にはそれを活かして欲しいです。私は生け花という命を生かすことを軸にして活動してきましたが、今になってわかるのは、人ができることというのは限りがあり、実は私もいろいろやっているけれども生け花のことも十分にはわかっていないわけです。まだまだわからないことの方がたくさんありますが、わからない、足りない、生け花ってなんだろう、と思っていることが、自分の原動力になって、次のチャレンジに繋がっているような気がしています。ですから、若い方にはどんどんチャレンジして欲しいし、失敗を恐れずに自分のやりたいという気持ちを大事にして欲しいですね。

渡辺 好奇心こそが大事ということですね。今日は貴重なお話をたくさん聞かせていただきまして、ありがとうございました。

池坊 ありがとうございました。

（以下敬称略）

渡辺 今日には井野瀬久美恵先生をお招きしまして、新型コロナウイルスに関する対談をさせていただきます。

最初に、井野瀬先生のご紹介を私からさせていただきます。先生は、甲南大学文学部の教授で、学術会議では現在、連携会員をされています。3年前までの先期は科学と社会を担当する副会長をされていて、つまり私の前任の副会長ということになります。井野瀬先生は、イギリス近代史、ならびにイギリス帝国史がご専門で、文化史の視点を活かした研究をなさっています。

正直申し上げまして、私は高校の時に歴史が一番苦手な科目でした。なぜかという、過去に起きたことを並べて覚えていくということに、私はあまり関心が持てなかったのです。ところが、井野瀬先生から歴史のお話を聞くと、過去のできごとから人間の営みや人間を巡る環境について考察され、そこから時代の流れを捉えていくという、これは非常に面白いと思いました。自然現象を解析して法則を見いだす自然科学と、非常に共通するところがあると思っております。

今日は、そのような観点から、今起きています新型コロナ感染について、井野瀬先生にお話を伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

井野瀬 こちらこそ、よろしくお願いします。

渡辺 それでは、最初に井野瀬先生にお伺いしますが、今、起きている感染は、歴史の視点から見た時に、どのように捉えることができるか、その点をお話いただけますでしょうか。

井野瀬 はい、分かりました。「歴史は暗記するもの」という歴史教育の負の側面を感じてこられた渡辺先生が、私と話す中で認識が変わり、歴史が面白く見えてきたというお話、とてもうれしくお聞きしました。歴史は暗記するものではありません。たとえば、『歴史とは何か』（1961）で知られる E・H・カーは、「歴史とは過去と現在の不断の対話である」という有名な言葉を残しています。私がこの間試みているのも、現在私たちが直面している状況をより深く考えるための、過去との対話です。

対話のツールとなるのは、過去の疫病流行を記録した数多くの史料（資料）であり、疫病をテーマとする文学作品です。真っ先に思い浮かぶのは、フランスの作家、アルベール・カミュの『ペスト』（1947）でしょうか。今ふたたび、日本のみならず、全世界でベストセラーとなっています。この作品が出版されたのは 1947 年、すなわち第二次世界大戦終結の 2 年後です。70 年あまり前の作品が、なぜ今読まれるのでしょうか。それは、『ペスト』というタイトルのせいばかりではないように思われます。

私にとって、このカミュの作品が興味深いのは、巻頭に置かれたエビグラフ——表紙を開けて最初に飛び込んでくる、作品の核心を突いた扉の言葉——に、第二次世

界大戦後というカミュの時代から 220 年余り前に書かれた、ダニエル・デフォーの言葉が使われていることにあります。小説『ロビンソン・クルーソー』(1719)の作者、といえば、渡辺先生、分かりますか。

渡辺

はい、わかります。

井野瀬

日本では『ロビンソン漂流記』というタイトルでも知られています。嵐で無人島に漂着したロビンソンという人物の、30 年近くに及ぶサバイバル物語です。カミュが『ペスト』のエピグラフに使ったのは、デフォーが残した次の短い一文です。

*ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは、何であれ
実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同
じくらい、理にかなったことである。(宮崎嶺雄訳『ペスト』、新潮文庫)*

「ある種の監禁状態」、閉じ込められた人間のさまざまな状態/状況をどう想像すればいいのか、その本質に迫ろうとする言葉ですが、この状態こそ、まさしく、2020 年の私たちが「自粛」という言葉で経験しているものに他なりません。

しかも、デフォーには、上記の一節が書かれる 50 年余り前、1665 年のロンドンを襲ったペスト大流行について、行政文書や新聞記事といった記録に経験者らの記憶を重ねて(デフォー自身は当時わずか5歳でした)克明に描いた、『ペストの年の日誌』(1722)というノンフィクションがあります。「ある種の監禁状態」が、ロビンソン・クルーソーの無人島経験だけでなかったことは明らかです。交易や戦争による人の移動と絡ませながら、デフォーが描く 17 世紀半ばの首都ロンドンの感染拡大の様子、流言飛語を含む人びとの反応、家屋閉鎖といった当局の対応策などは、それから 350 年余りのち、緊急事態宣言が出された私たちの経験と否が応でも重なります。

かくして、コロナ禍の 2020 年、再びベストセラーとなった 1947 年のカミュの『ペスト』、カミュが注目した 1720 年前後のデフォーの言葉、そしてデフォーが書き残した 1665 年のペストの記憶は、「ある種の監禁状態」という言葉でしっかりとつながるのです。この言葉が多様な状況に適用できることにご留意ください。カミュの『ペスト』も、疫病の話だけではないのです。

「過去」という言葉は「過ぎ去る」と書きますが、実は過ぎ去ってしまうものではありません。後世の人間が自分たちの今と照らし合わせながら、現在を見つめ直し、未来を展望、模索する参照軸ともなり得るのです。だから、決して暗記するものではない。それぞれの過去は現在と確実につながっていて、私たちがさまざまに考えさせてくれます。私が今改めて重要だと感じるのは、こうした過去と現在との対話であり、対話から見えてくる可能性です。

渡辺

ありがとうございます。先生、少し前に聞いたお話ですけれども、ペストなどの感染症がきっかけで国境を渡るためのビザなど、今、当たり前の制度がいろいろできたというようなお話をお聞きしたことがあります。その点、いかがでしょうか。

井野瀬

そうですね。前の時代との関連で、何が残り、何が新たにつくられたのかを考える視点は重要です。例えば、現在われわれが考える「国境」なる線(あるいは国境線を引くという行為)は、近世以降のヨーロッパの国家制度に起因するものであり、比較的

新しいものです。それ以前、人びとは国家という制度、システムとは別の原理で、いわゆる国境など気にせず、移動していました。

人びとの移動にビザやパスポートの所持が重要になってくるのは、第一次世界大戦後のことだといわれています。とはいえ、それが、第一次世界大戦終盤の 1918 年に始まるスペイン風邪の流行と関係しているかどうか、私はよく存じません。

ただし、感染症や疫病は、人の移動で生まれます。人の移動がなければ、それはある地域に限定された病、風土病に留まるでしょう。人の移動が疫病を、エピデミック、パンデミックを発生させていることは、先ほど紹介したデフォの時代、1665 年のペスト流行時にも広く共有されていたようで、当時のロンドン市長の布告では、接触を避けるための隔離や遊興施設の営業制限など、人の動きを抑制する対策がすでにいくつかとられています。

渡辺 つまり、歴史の積み重ねで今があるのであって、今、感染症に対して何が足りないという議論が盛んにされていますが、今当たり前にあることも、過去の感染症の経験からできてきたものが土台にあるということですね。

井野瀬 その通りです。積み上げてきた経験やそこから得られた知恵の存在を、人は忘れがちです。その意味でも、過去との対話が、現在を生きるわれわれには必要です。2020 年の今、われわれは初めて感染症を経験したわけではないのですから。

渡辺 ペストの時代にもいろいろな制度ができましたけれども、今の時代と比べると異なる部分もたくさんあると思います。今は情報通信技術で、このように家に閉じこもりながらも私たちはこうやって対談ができています。

井野瀬 そうですね。

渡辺 オンラインでいろいろなことができて、それこそ会議もできますし、シンポジウムさえもできる、国際会議だってできる、こういう時代に入ってきています。多分、こういう状況は今までの感染の経験ではなかったと思いますが、この観点から見た時に、どのように今の課題を考えることはできますでしょうか。

井野瀬 とてもいい質問です。歴史家は常に、過去に「すでに起こった未来」を求めたくなりますので、それを抑制する意味からも、過去と現在との違いを考えることは大切です。2020 年の現在、情報ネットワークや最先端の技術によって、かつて人が移動しなければできなかったこと、現場にいなければできないことができるようになっています。それは、オンラインシステムを通じた授業を経験した多くの大学教員の実感でしょう。その点は、渡辺先生のご指摘通りだと思います。

さらには、膨大なビッグデータが新型コロナウイルス感染対策にも活かされており、それもこれまでの時代にはなかったことですね。濃厚接触者がアプリで簡単に検出できてしまうという、シンガポールのトレース・トゥギャザーという例もあります。こうした技術革新は、これまでの時代にはあり得なかった新たな可能性にわれわれを導いているように思われます。

その一方で、収集された個人情報などが別のことに使われないかという懸念も指摘されています。だったら、データアクセスのセキュリティーレベルを上げればいいのかというと、この場合、それは問題の本質ではないように、私には思われるのです。

情報技術の発達で、研究調査やその分析、成果の共有のスピードは格段に速くなりました。遠くにいる人たちと簡単につながることができるし、会議も持てる。こうやって渡辺先生と対面で議論だってできてしまいます。確かに素晴らしいことです。しかしながら、それら、つながる、会議する、議論するという行為の根底には何があるのでしょうか。そこに、ポストコロナの世界、時代と社会をにらんで私たちが考えねばならない、本質的な問題があるように思うのです。

それは、一言で言うならば、人間としての信頼関係の問題、です。Zoom のセキュリティーを上げる以上に大切なことは、会議を主催・配信する人たちとの信頼関係ではないでしょうか。今、私は学会が主催するオンライン上で話をしていますが、私が安心して率直にものが言えるのは、学会という組織への信頼、そして対談する渡辺先生との間にこれまで築いてきた関係があるからです。だからこそ、人との接触を断つことが望ましいとされる新型コロナウイルス感染防止策の現状においても、本音で本気の議論ができるのです。

言い換えれば、情報技術を使って、既に存在する信頼関係に基づいて物事を動かすことはこのように可能でしょうが、協働のベースとなる信頼や尊敬といった人間関係性そのものを、オンライン上で一から創ることはできるのでしょうか。私はそれには懐疑的です。オンラインでつながる人間関係と、対面の肌感覚、身体感覚で育まれるそれは、どこか違ってると直感的に思うのですが、どこがどのように違うのかを実証的に示すことは難しいですね。これまであまり考えたこともなかったのですが、この問題、信頼や尊敬、愛情といった人間関係を支えるキーワードで検証してみる価値がありそうです。

渡辺

今の先生のお話には、とても納得できる部分があります。なぜかという、大学でも大学生が孤立してしまうのではないかと、先生がたはとても心配されていますが、先生が心配するよりも学生は自分たちでネットワークどんどん組んで、会話をしているという話をよく聞くからです。

ところが、新入生はそれができない。いきなり知らない人とオンラインで会いましょうと言われても、なかなかそれはできない。だから、今、大学では新入生が非常に困っているという話を聞きますけども、それは今、井野瀬先生が言われたことと、ぴったり同じことですよね。

井野瀬

おっしゃるとおりだと思います。私も、一度も実際に顔を合わせていない新入生と、「基礎演習Ⅰ」というゼミのような担当科目でどのようにして関係性をとり結べばいいのか、悩みました。毎週の講義画面で顔は目にするのですが、画面越しでは、彼らに誤解されず、傷つけず(ご存じのように、昨今の学生はとても繊細です)、意思疎通ができるのか、言葉選びも容易ではありません。まずは、オンライン講義後に、「話をしたい人がいれば残ってね」と、対面に近いやりとりを始めてみました。でも、先生と

画面を通じて話をしようとする学生はごく少数です。個人メールや大学のオンラインシステムなどを使ってフォローを試みましたが、対面のような「気安さ」はなかなか醸し出せません。一方、同じくオンラインでの対面講義となった3、4年次のゼミ生には、そのような配慮は全く不要でした。WEB画面上での報告にも質疑応答にも物怖じしないのです。互いに冗談を言ったり、横道に逸れたりできるのも、オンライン以前の信頼関係、そこから生まれる安心感の賜物でしょう。

どのような規模、性質の組織であろうと、活動のベースには人間関係があり、それがとても大切なのです。技術がいかに発達しようと、それだけでは創れない信頼感、安心感があるように思います。あるいは、情報工学、ロボット工学などの技術や知識を導入すれば、人間関係などなくても、協働や議論が進められるのでしょうか。そのあたりのバランスについても知りたいものです。

渡辺 ありがとうございます。この件について、ずっとお話ししていたいのですけども、次の質問をさせていただきます。

井野瀬 はい。

渡辺 今、これだけ新型コロナ感染で社会が大きく変わっていますが、この感染が収まったとしても、多分、社会は元どおりには戻らない、新しい社会に入っていくだろうと言われています。井野瀬先生が歴史の観点からこの点についてどうお考えか、お聞かせいただけますか。

井野瀬 うーん、渡辺先生の質問はなぜかくも鋭いのでしょうか(笑)。実は、私自身、今とても疑問に思っている言葉があります。「新しい生活様式」という言葉です。おかしくないですか。「引き続き、感染防止対策を採って警戒を続けてください」と言えばいいのに、なぜ「新しい生活様式」と、「新しさ」を強調するのでしょうか。

すでに述べてきたように、そのような疑問を感じた場合に大事なことは、「新しい」という形容詞で語られるもの/ことが本当に新しいか、そこに違和感を覚える理由は何か、さらに、「新しい」としたらなぜ新しいのか、それを自分でしっかりと、深く考えることです。その際のポイントは、渡辺先生が最初にご質問してくださったときに話したように、時間軸を入れて現在を考えること、にあります。しかも、できるだけ「自分事」として考えること。

中学や高校で歴史を学ぶと、歴史はとても遠い、はるか昔の話であって、自分とは関係がないと思いがちです。でも、実は、歴史をつくっているのは私たち一人一人なのです。私たち一人一人が、時代の場面、場面をつくってきたのであり、それを私たちはそれぞれに記憶し、記録してきたことを忘れてはいけません。今、この瞬間もそうです。メモ魔は私だけではないはず(笑)。コロナ禍でさまざまなものが揺らいで見えるこの時期の「記憶と記録」は、ポストコロナの世界で、これまで以上に大事になってくるでしょう。

特に、「記録する」という行為では、言葉に対する敏感さ、繊細さも試されます。何よりも、記録として文字化、言語化する過程そのものが、自分と自分が生きる時代とをみつめ直す時間でもあるのです。

渡辺

新しさを問い直すこと、そして記録することを今忘れてはいけないということですね。その重要性は私にもよくわかります。どうもありがとうございます。

最後に質問したいことは、今の人文学についてです。井野瀬先生は歴史学者で人文学の中枢にいらっしゃる方ですが、人文学の価値というものが、今、改めて多くの人々に見直されている時期だと思います。私も人文学のお話は本当に重要だと思い興味深く聞かせていただいています、人文学が今回の感染やこういう社会の大きな変化に対して果たす役割について、お話いただけないでしょうか。

井野瀬

はい。先ほどの質問とも関係するのですが、まずは「緊急事態宣言」という言葉についてです。東京はまだのようですが、私の生活圏である大阪や兵庫でようやく解除されることになったこの宣言が依拠する「歴史的緊急事態宣言」は、はたして正しく理解されているでしょうか。正式には、行政文書の管理における「歴史的緊急事態」、といいますが、2020年3月10日付で内閣府大臣官房公文書管理課から発出されています。この文書によれば、「歴史的緊急事態」に指定されると、政府関係の会議の「記録」が義務化されます。すなわち、今私たちが経験していることを、後世の検証に耐えうるように、正確かつ適切な言葉で記録（そして記録のために記憶）することは、私たちの責務なのです。しかしながら、医療や治療、介護や看護といった現実的な問題がひっ迫しているなかで、この責務を意識する人がどれくらいいるでしょうか。それこそ、人文学、わけでも歴史学の仕事です。

感染拡大中に必要とされる医療や看護の現場に、人文学の入る余地はないかもしれません。人文学をなりわいとする者に、ワクチンを開発したり、感染者を治療したり、感染拡大を予測する数値を計算したり、などはできません。しかしながら、「歴史的緊急事態」をつぶさに観察し、見張り、記憶し、記録し、考えつづけ、後世の検証に耐えうるものにする活動は、われわれ人文学者が得意とすることです。そして、「過去と現在との対話」を成立させるべく「今」をしっかりと見張ることは、歴史学者の領分に他なりません。

人間というのは、さまざまな意味で、過去を必要とする生き物です。過去は過ぎ去るけれども、本当は過ぎ去らないと先ほど申しました。次の瞬間に過去となる「今」を、将来の検証に伏すために見張ること——それはイコール、未来を見張る、未来を考えるということなのだ、と、私自身、あらためて思っているところです。

渡辺

ありがとうございます。今、この感染が広まり、また収束しかけているというこの状況の中で、生命科学の大切さは誰も疑わないですが、理学、工学も次の時代をつくっていくためには大事ですし、社会科学も当然新しい社会をつくるためには必要です。そして、人文学が果たす役割も大きく、それぞれがそれぞれの役割を果たしながら、独立したものではなくて一緒に考えていくということが、とても大事だということですよ。ね。

井野瀬

そうです。ポストコロナ社会にはその多様性が何よりも必要だと思います。それぞれの専門家がそれぞれの経験に基づいて、率直に対話することが不可欠だと考えま

す。その意味での多様性を確保するためにも、人文学が「今」をしっかり見張らねばならないと思うのです。

渡辺

そういう意味では、日本学術会議がこの機会に社会に果たせる役割はとても大きいと思いますし、今日のこの対談もその一助になるものと思います。とても貴重なお話をいただき、どうもありがとうございました。

井野瀬

いいえ、渡辺先生、歴史学者の私をこういう場に引き出してくださり、ありがとうございます。あらためて、歴史学者として、今考えねばならないことをひしと実感いたしました。本当にありがとうございました。

渡辺

ありがとうございました。

「日独比較に見る新型コロナウイルス後の世界」2020/06/24 収録

対談者：Iris Wieczorek（イリス・ヴィーツォレック）（日本学術会議 外国人アドバイザー、
（株）IRIS 科学・技術経営研究所 CEO）

主催者：渡辺 美代子（日本学術会議副会長、科学技術振興機構副理事）

（以下敬称略）

渡辺

皆さま、こんにちは。今日は、イリス・ヴィーツォレックさんをお招きして対談いたします。

イリスさんは、現在、日本学術会議の外国人アドバイザーをしてくださっています。既にモンテ・カセムさんと山極会長の対談をご覧になった方もいらっしゃると思いますが、モンテ・カセムさんと同様の外国人アドバイザーということになります。

最初に私からイリスさんをご紹介します。ハンブルク大学で日本学、中国学、そしてコンピューターサイエンスを専攻された後に、早稲田大学と福井大学に留学され、その後、ハンブルク大学にて日本の研究で博士号を取得されました。その後、ハンブルクにあるライプニッツ協会の研究所で仕事をされ、国際比較に見る日本の経済、科学、社会におけるイノベーションプロセスとネットワークの研究を進められました。日本について研究された、日本にとっても詳しい方です。

2008年には、ドイツ研究振興協会、DFGと呼んでいます、ここの日本代表部を設立され、その代表も務められました。私はDFGに大変お世話になっていますが、イリスさんが設立してくださったおかげです。私だけでなく学術会議の関係者も、DFGにお世話になっている方はたくさんいらっしゃると思います。これも皆さん、イリスさんのおかげです。

ヴィーツォレック

ありがとうございます。

渡辺

2012年には、株式会社IRIS 科学・技術経営研究所を設立されました。学術研究を取り巻く環境の戦略等の日欧比較を進めながら、研究マネジメントに関するアドバイスやコーチングを行っていらっしゃいまして、大学や研究機関の若手研究者を対象としたリサーチマネジメントセミナーなどもされています。

今日は新型コロナウイルス感染のドイツと日本の比較などから、新型コロナウイルス感染を経験した私たちの未来について、お話を伺いたいと思います。

イリスさん、どうぞよろしくお願いいたします。

ヴィーツォレック

よろしくお願いいたします。

渡辺

それでは、最初にお伺いします。大学までずっとドイツにいらっしゃって、その後、日本に留学され、現在お仕事も、また住居も日本でいらっしゃいますが、なぜイリスさんが日本にこうやって仕事をし、住もうと思ったのか、そのきっかけを教えてくださいませんか。

ウィーツォレック ずっと昔に戻ることが必要だと思います。私は 14 歳の時に、私の親と一緒にインドネシアに行かなければならなかったのです。だから、14 歳の時にすぐアジアの影響を受けました。インドネシアの人は経済的にも貧しいのですが、でも毎日をできるだけ大事な日にして、できるだけ楽しもうという気持ちを持っていました。私にとってはそれがとても印象的で、将来はアジアと関係がある仕事をしたいという気持ちになりました。だからドイツの大学では日本学科を選びました。

渡辺 なるほど、14 歳という思春期、多感な時期にアジアを経験されたことがもとなっているのです。それがきっかけでアジアにとっても興味を持ってくださって、日本にもこうやって貢献いただいているという状況ですね。ありがとうございます。

次に新型コロナウイルス感染のお話をお聞きます。ドイツはこの感染に対して模範となる対応をされた国の一つと言われています。ご存じの範囲で結構ですので、ドイツの様子について伺いできないでしょうか。

ウィーツォレック ドイツ政府は、今回のような新型コロナウイルスによるパンデミックへの備えは十分ではありませんでした。日本も他の国も同じだったと思います。だから、最初は厳格な措置と規制との発動に消極的でした。ドイツから中国は遠く離れているので、自分たちには関係ないと思い、旅行に関する規制もゆるく、3 月の中旬まで中国やその他の地域からの渡航者への入国制限はありませんでした。ところが、南ドイツの辺りでカーニバルがありましたが、カーニバルはわかりますか。

渡辺 お祭りですか。

ウィーツォレック そう、お祭り。大きなお祭りでハグしたり、キスしたり、大勢がパーティーをやる機会ですが、これも中止しませんでした。その結果、カーニバルの場所が感染のホットスポットになりました。これは大間違いだったわけです。また、その後のイタリアでの感染拡大はドイツにとって大きなショックでした。その時、ドイツの国内の感染者数は 3 月ぐらいですぐ急に増加しました。

そして、感染症の深刻さが認識されると、ドイツ政府はすぐ動き出しました。その時には。メルケル首相が、クライシスマネジャーの意識が強いことを見せられました。彼女がドイツの人にとってお母さんのような立場を取った、という印象を受けました。だから、その時、ドイツの国民が彼女に任せるのが一番良いという意識が強かったと思います。

メルケル首相の政党である、Christlich Demokratische Union の政治団体は、支持率を取り戻しました。それ以前には、すごく下がっていましたが。ドイツ政府の戦略に関しては、五つの重要なポイントがあると私は思います。

一つ目は、正しい数を得るためにできるだけ多くの検査をしたことです。本当に何人ぐらいが COVID-19 ウイルスを持っているかを確認するためには、大勢に検査しないといけないという戦略が非常に大事でした。

二つ目は、医療システムへのストレスをできるだけ回避しようとしたことです。イタリアの場合には、医療システムがストレスを受けましたね。

三つ目は、厳格なロックダウンに加えて家での規制、人との物理的な距離をとることや、マスク着用の義務などを行ってきました。このような個人の自由への強い規制を経験するのは、ドイツ人にとっては第 2 次世界大戦以降初めてでした。ドイツの場合、当初、マスク着用はあまり意味がないと学者も言っていましたが、日本の感染者があまり増えない現状を見て、マスク着用は何か意味があるはずだという理解がだんだん増えてきました。その結果、マスクの着用はドイツでは義務になりました。今でも、スーパーマーケットに入る時には、マスクの着用が必要です。四つ目のポイントは今、感染率が低下した場合には、制限を段階的に解除することが重要でした。

五つ目は、トラッキングアプリです。韓国では、トラッキングアプリが非常に重要でした。でも、ドイツの人には、自分の自由に関する心配があったので、トラッキングアプリに対しては慎重な姿勢を取っていて、希望者のみが利用します。1 週間ぐらい前、6 月の 16 日にトラッキングアプリのリリースが発表されました。これから近くにコロナウイルス感染の人がいたら、その後すぐ連絡が来ますので、これが役に立つと思います。今、大体ドイツの人口の 6 割ぐらいが、そのトラッキングアプリを利用しようとしています。

渡辺

トラッキングアプリは日本も始めました。これがどのぐらい有効かということも、世界各国の比較ができますね。今のお話の中で、メルケル首相がこの感染に対してリーダーシップを発揮したということでした。ドイツの国民にとって個人の自由は戦後、何より大事だったけれどもお母さんのような存在のメルケルさんについていこうと思われ、そこがうまくいったということなのですね。

メルケル首相は物理学で博士を取られた方で、科学を十分よくご存じです。科学で博士を取られた首相ということと、今回の対応には関係あると思いますか。

ウィーツォレック

関係があると思います。彼女は科学者と話すことが上手だと思います。同時に、お母さんという印象が強かったので、4 月末ぐらいまではドイツ国民の大勢が政府による厳格な規制を支持し、この感染拡大を抑えるために政府の決定に従うという合意がつくられていったと思います。自分の自由より、皆さんの健康が大事ということでした。

渡辺

社会全体のためにということでしょうか。

ウィーツォレック

そうです。自分の家族、そしてドイツ、ヨーロッパのためです。コロナウイルスのパンデミックをストップしないといけないという気持ちが非常に強かったのですね。私にも印象的ですが、日本の場合、マスクは他の人のために着用しますね。

渡辺

そうですね。人にうつさないためにということです。

ウィーツォレック

ドイツの人たちにはそういう意識はあまりなかったのです。自分のことは自分で守る、という考えが基本でした。しかし、今のコロナウイルスのパンデミックの際には、ドイツの人の結束が見られました。例えば、ハイリスクのグループとなった高齢者が家にいる場合には、若い人たちが彼らの代わりに買い物に行きました。若い人たちが高齢者を助けようと、何とか守るためにいろいろなことをやりました。これは

すごくいいことだったと思います。自分を守るだけでなく、周りの人も守ることが非常に大事になりました。だから、ドイツの人は今マスクを着用していますが、半年ぐらい前までは誰もそういうことはしなかったのです。

渡辺 マスクを皆が着用するようになったというのは、もちろん義務化という制度もありますが、皆の気持ちの中に日本を見て人にうつさないためにマスクをしようと、人の気持ちにも日本が影響できたということなのですね。

ウィーツォレック そうですね。日本やシンガポールなど、いろいろなアジアの国の影響があったと思います。

渡辺 それはうれしいお話ですね。

ウィーツォレック メルケル首相が科学者という話に戻っていいですか。

渡辺 もちろんです。とても大事な点です。

ウィーツォレック 今回、ドイツでは科学者が重要な役割を果たしました。例えばロベルト・コッホ研究所のような科学機関が議論の枠組みを作り、取るべき対策を提案するなど、重要な役割を果たしてきました。それに対して、ドイツ政府はこれらを参考に、科学者と科学的な評価に基づいた決定をきちんとしてきました。メルケルさんだけではなく、その他の政治家もきちんと科学者の意見を聞いていました。これは、科学者が国や社会を先導する役割を担うことになったことを意味しますが、それは初めてのことです。

渡辺 それはとても重要ですね。

ウィーツォレック また、例えばロベルト・コッホ研究所の所長は、毎日のインタビューで状況を報告しました。毎日の状況だけを発表するではなく、科学者の役割で自分の意見を出しました。意見を率直に出しました。

渡辺 その科学的な事実を示すだけではなくて、見解や意見までもきちんと示したということ、それは自分がきちんと責任を負う覚悟を示したということですね。

ウィーツォレック そうです。自分の科学者としての立場で意見を言いました。科学者の役割、政治家の役割、それぞれありますが、直接自分が考えることを自由に発表しなくてはいけない、これが非常に大切だったのです。生物学者や疫学者はその議論をリードしました。最近では経済学者や心理学者、社会学者がいろいろな議論を公表してきました。

渡辺 それは、社会の課題が経済や社会の問題に移ってきたということですね。ありがとうございます。この新型コロナウイルスを経験したのはドイツも初めて、私たちも初めて、世界中の皆が初めてですが、この経験をもとにこれからの未来がどうなっていくか、また、どうなってほしいかを含めてお話いただけますでしょうか。

ウィーツォレック ドイツの経験をまとめますと、最初のうちにはドイツ国民は科学的な評価に基づいた政治家の決定による対策に合意しました。でも、5月に入って、政治的なイデオロギーにこの危機が利用されるという新しい危険を目の当たりにしています。だから、右翼ナショナリズムや、左翼資本主義バッシング、さまざまな陰謀説があり、これが今の課題です。渡辺先生がご存じかどうか、Xavier Naidoo というドイツのシ

ンガーでポップスター、彼がその陰謀説の熱烈な信者です。だから、今、そういう陰謀説があつという間にあちこちに広がっていて、フェイクニュースも広がっています。

だから、私は未来の社会のために二つのことが非常に大切だと考えます。一つ目は、科学とサイエンスコミュニケーションが非常に大切です。二つ目は、全てのことを考え直すべきということです。その科学とサイエンスコミュニケーションに関して、まずお話します。基礎科学や応用科学を含め、優れた独立した科学が非常に大事だと思います。今のコロナウイルスのパンデミックによって、これが明らかになりました。基礎研究が必要ないと言う人もいますが、パンデミックの時には基礎研究と応用研究の両方が大事です。

渡辺 その独立した研究という独立は、何から独立ということでしょうか。

ウィーツォレック 政府からの独立です。例えばロベルト・コッホ研究所は政府から資金をいただきますが、科学の自由を絶対守らないといけない、と皆が理解しています。いくら資金をいただいても、科学の事実を政府の意図とは独立して発表しないといけないのです。

渡辺 それは科学者のためではなく、社会全体のため、政治家のためでもある、きちんと発言することこそが皆の役に立つ、そう信じながらやるべきということですね。

ウィーツォレック そうですね。市民のためですね。政府からの独立性がないと、市民の役に立たないと思います。あとは、その市民や政治家ときちんとコミュニケーションをとれる科学者も必要です。サイエンスコミュニケーションがこれからの未来のために、未来の社会のために、もっと重要になると思います。政治家と科学者は違う役割を持っていますが、皆さんが責任を取るべきですね。その政治家のせいで失敗したとか、科学者のせいで失敗したとか、そういうことは言うべきではないと思います。皆が責任を取るべきだと思います。

渡辺 独立して考え、独立してきちんと発言すべきだけれども、その行動も独立するのではなくて、その後、一緒にコミュニケーションしながら、どうやったらいいかを一緒に考えていったらいいということですね。その対話がなかったら、完全に独立しただけだったら皆にとって意味がないし、社会のためにならないとことですね。

ウィーツォレック そうです。だから、本当にお互いの意見を大事にして、一緒に議論をしないといけないと思います。あとは、コロナウイルスのパンデミックだけでなく、例えば気候変動問題についても同じことが言えます。若い世代のフライデーズ・フォー・フューチャーを考えることも大事です。

渡辺 それは世界中にありますし、日本にもあります。

ウィーツォレック そうですね。この運動は科学によって正当化され、支持されています。私の印象では、これによって初めて若い人たちが科学のオーナーシップを取ります。これはすごく未来社会のために大事だと思います。世界中の多くの科学者が、この若い世代による運動を支持しています。本当にこれは大切です。サイエンスコミュニ

ケーションに関しては、アウトリーチが大事ですが、インリーチも大切だと思います。

渡辺

そうですね。アウトだけではなくて、ちゃんと科学者も市民の声を受け入れないといけないということですね。

ウィーツォレック

科学者コミュニティの中ではサイエンスコミュニケーションが大切という運動が必要ですし、意識改革がないといけないと思います。そうしないと、フェイクニュースがだんだん広がって、科学があまり意味ないものになると思います。コロナウイルスのパンデミックはウエークアップコールということです。

渡辺

今回を一つのきっかけとして、これからの社会の方向は、皆が一緒に、そして科学者も社会の大事な機能の一つとして責任を果たしていくことが大事ですね。イリスさんは、若者がこうやって前面に出て主体になることがとても大事だと、オーナーシップを持つことが大事だとお話されました。若者がこれから未来をつくっていくので、若者にもっと責任を持って頑張っていただくこと必要だと思いますが、その時に私のようなシニアが何をすべきかについても、ご意見いただけないでしょうか。

ウィーツォレック

若者をサポートしなければならないと思います。私たちは若い世代より将来のことも今のこともよくわかっているという考え方を持っている方がいるかもしれませんが、でも、そうではないでしょう。若い世代の価値観をちゃんと守らないといけないと思います。今は皆がビジネス・アズ・ユージュアル、つまり元に戻りたいのですが、戻れないと思います。ニューノーマルな世界がだんだん入ってくると思います。私の二つ目として言いたかったことは、全部考え直すべきだということです。若者との議論や若い世代とのインタラクションも変えないといけないと思います。だから、全てのこと、やり方とか考え方とか、これからできるだけ変えないといけないと思います。

渡辺

全てを考え直すということは、主体を若者に移していくということですね。

ウィーツォレック

そうです。私たちの場合には、経済的な価値観がすごく重要です。だから、これまではその経済的な価値観で動きましたが、コロナウイルスの場合には、その経済重視の忙しい生活には戻れないのです。戻れば次のコロナウイルスの波が起こるかもしれないのです。だから、これから経済的な価値観よりもっと何がいいかを考えないといけないのです。シニアだけで考えるとあまり意味がないです。若い世代の将来でしょう。だから、若い世代と一緒に考えないといけないのです。

今、私が感じているのは、この社会が不均衡だということです。いろいろな不均衡があります。お金持ちと貧乏、国々の不均衡もあるし、シニア世代と若い世代の不均衡もあります。私が思うのは、若い世代が私たちに怒るべきです。もっと怒るべきです。このままでは、私たちが彼らの未来を壊してしまうでしょう。現状を見ますと、私たちの責任が大きいです。若い世代の責任はまだこれからです。だから、フライデーズ・フォー・フューチャーのリーダーや、一部の若い人たちはすごく怒っています。私はもっと怒るべきだと思います。このまま続けると、不当や不

均衡がもっと大きくなります。私たちの価値観は彼らの価値観ではないかもしれないのです。今こそ、紙の上ではなく、本当に変わる時なのですから。

渡辺

行動も伴う形ということですね。その時にイリスさんが一番言いたいのは、シニアが未来はどうあるべきか一生懸命考えるよりも、若者に考えてもらい、若者に自ら発言し行動できる場を、私たちはむしろつくるべき、それが私たちの責任だということですね。

ウィーツォレック

そうです。だから、科学とかサイエンスコミュニケーションに関しては、もっと力を入れないといけないと、私は思います。未来のためには科学がないと、客観性が全然なくなり、フェイクニュースが増えます。だから、科学が貢献しないと本当に変な未来になる可能性が大きいと思います。

渡辺

今日のイリスさんの未来に関するご意見は、科学、そして、それがコミュニケーションしていく必要があるということと、若者、これが非常に大事であると私は受け止めました。それから、ドイツの現実もお話いただいて、とても勇気づけられたような気がします。最後に皆さんに向けてメッセージをお願いいたします。

ウィーツォレック

未来のために、これからもっと時間を取るべきだと思います。日本語のことわざで、「急がば回れ」があり、今急いで前の状態に戻ることが大事なのではなく、本当にきちんと若者と議論しながら、何とかいい未来を探すということが大事だと私は思います。今の不均衡や差別は深刻です。例えば、私は今日本にいますが、他のこれまで日本に住んでいた外国の人は、今は日本に戻れないという状態になりました。

また、若い人たちには、今、例えば「失われた世代」があるかもしれないです。今、若い人たちは仕事を探していますが、なかなかいい仕事が見つからないかもしれないのです。だから、若い世代の皆さまが未来をどのようなものにしたいかを、今、大きな声を上げてほしいのです。あとは、シニアがその若い世代をサポートしないといけないですね。お母さんのサポートではなく、お互い同じレベルで議論をするサポートが必要です。例えば、若い研究者に関して独立性が大切です。自分の考え方、自分の価値観をちゃんと発表することが必要です。今回のパンデミックによる負債は、将来の若い世代にかかっていくことになることを忘れてはいけません。一生懸命、学術会議とともに、将来のために、いい未来のために、声を出しましょう。

渡辺

特に若者が、ですね。そして、私たちは若者がそれをやりやすくなるような環境をつくっていくべきということですね。ぜひ、一緒に頑張りましょう、これから。

ウィーツォレック

一緒に頑張りましょうね。

対談者：沖 大幹（日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学系研究科教授、国連大学上級副学長）

主催者：渡辺 美代子（日本学術会議副会長、科学技術振興機構副理事）

（以下敬称略）

渡辺 本日は、沖大幹先生をお招きしまして、対談をいたします。最初に私から、沖先生をご紹介しますいただきます。先生は東京大学大学院工学系研究科の教授であり、また、国連大学の上級副学長でもあります。ご専門は水循環、水資源、それと気候変動、持続可能な開発ということで、私から見れば、自然環境と人間社会の関係を捉える研究をされていると理解しております。学術会議では現在連携会員として、科学と社会委員会の委員をいただいています。この委員会では SDGs を学術の観点から議論し、学術会議の提言と SDGs の関係をホームページで公表していますが、その議論の中で沖先生には SDGs の話題提供や問題提起をしていただき、中心的役割を果たしていただいています。

今日の対談は、いつもと同じように新型コロナウイルス感染が変える未来をテーマにお話を伺いますが、特に学術と SDGs に焦点を当てながらお話を伺いたいと思います。沖先生、どうぞよろしくお願いいたします。

沖 よろしくお願ひいたします。

渡辺 それでは最初にお伺ひします。先生は SDGs に関して日本をけん引する役割を果たしていただいています。SDGs に関わったいきさつを最初にお話しいただきたいと思います。ご専門なので、当たり前といえば当たり前ですが、どのようないきさつがあったのか、皆さんにご紹介いただけないでしょうか。

沖 私の専門は、もともと工学系、土木工学という分野になります。そこで河川を治める、あるいは流域の水循環をよりよいものにしていくといった研究をしているうちに、ローカルな水の循環も地球規模の水循環の一部だということに気づき、地球科学的な水循環の研究をずっとしてきました。その知識が増えて、水循環の予測可能性を上げることが社会の役に立つのではないかと思い、研究をしてきたわけです。ところが、安全な水にアクセスできないだとか、あるいは水が足りなくて困ってしまっている、あるいは水を巡る紛争が起こっているといった問題の解決には、どうもそういう科学や技術だけでは足りないのではないかということが、ちょうど 20 世紀から 21 世紀になる頃に、国際的に議論されました。

そうかと気づいた時に知ったのが SDGs の前のミレニアム開発目標、MDGs でした。なので、安全な水にアクセスできない人口割合を 1990 年に比べて 2015 年までに半減するぞ、という課題を、どうやって世の中は、世界は達成しようとしているのだろうか、ということに非常に興味を持ったというのが SDGs につながるきっかけでした。そういう科学と技術だけではなく研究も大事だと思ったのがそもそもの始まりだ、ということになります。

- 渡辺** なるほど。先生のご専門である水、そこから SDGs への関心が深まっていったと、そういう理解でよろしいでしょうか。
- 沖** そうですね。きっかけは専門の水だったのですが、それに加えて、グローバルな水の問題を扱っていたので世界共通の課題に取り組むこととなりました。そうすると、どうしても気候変動の問題にぶつかり、それがどう変化するのか、それが単に雨が強くなるとか暑い日が増えるとかだけではなくて、経済的被害なども含めて人間社会にどんな影響があるのだろうかというところまでをきちんと科学的に予測しないと、せっかくいい研究をしても意味がないのではないかと考え、現在では水と気候変動と持続可能な開発が専門分野となっています。
- 渡辺** ありがとうございます。今は新型コロナウイルス感染で社会全体、それこそ環境も含めてあらゆるものが変わりかけています。SDGs に新型コロナウイルスの感染がどういう形で影響し、また、そこからどのような課題が見えてくるのでしょうか。この点をお話しいただいてもよろしいでしょうか。
- 沖** まず一番の SDGs にとっての懸念というのは、グテーレス国連事務総長も新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響が拡大するの前から言っていますが、やはり経済的な成長に伴う途上国への投資の増加というのが SDGs 達成には不可欠であるという点です。ところが、2015 年から少しずつ世界の景気が悪くなっていきました。それがさらに、この 2020 年の COVID-19 の影響で世界的に景気が非常に悪くなって、内向きにもなり、対外投資が減ってしまいます。今、本当にこれから開発が必要とされている途上国に資金が回らなくなって、なかなか SDGs の達成が難しいのではないかなというのが一番大きな懸念材料だと思います。
- 渡辺** なるほど。世界中で SDGs 達成に向けて協力しながら一緒にやっっていこうという状況にあった中で、各国の国境が閉じてしまうような、そういう私たちが望まないことをしなければならなくなってしまった、この状況が非常に SDGs にとっては危険であるということですね。
- 沖** そうです。これは単に言っているだけではなくて、ミレニアム開発目標の際には、やはり中国とインドの経済発展というのが、水の目標であったり、スラムに住む人の生活を大いに改善するであったり、極度の貧困にあえぐ人々を減らすであったり、そういう目標の達成に非常に貢献しています。ですから、SDGs、あるいはアジェンダ 2030 でも、ぜひそういう途上国が経済発展していけるような対外投資というのが非常に求められていましたが、それが減りそうだというのは非常に大きな問題ではないかと思います。
- 渡辺** 今おっしゃったのは、SDGs と経済が非常に強く結び付いているということですね。また、このような感染症は歴史的に見れば、ある頻度で人間社会には起きてきています。特に文明が発達して交流が盛んになれば、必ず感染症が文明の交流と一緒に大きくなっていくのは常にあることで、つまりたまたまのことではないということです。ある程度、人間社会には起きるべきことだと、そのように捉えることもできると思います。

が、その観点から、これから SDGs を達成していこうと私たちが考えている未来は、どのようなものになっていくと沖先生はお考えでしょうか。

沖

まず、今回の COVID-19 の問題はグローバル化が進み過ぎたせいだという方もいますが、考えてみれば、100 年前のスペイン風邪にせよ、もっと前の世界的ないろいろな感染症にせよ、今みたいにグローバル化が起こってなくても、やはり結局は広がるわけです。なので、今、渡辺副会長がおっしゃったとおり、これは人類にとって時々来るものである。ただし、昔は世界の裏でどんな人がどんなに困っているか、よくわからなかった。今はわかる。わかるというのはどういうことかという、例えばオリンピック、来年の夏に日本がやりたいと思っても、世界のどこかで苦しんでいる人がいて、また感染症、COVID-19 が広く感染拡大している。そういう時に、感染が収まっていない国の人は来なくていいですから、もうピークを過ぎた国だけで開催しますっていうことはできないですね。

というふうに、良くも悪くも世界は一つになったということで、自分の国だけが感染症から守られればいいというわけではないという風に世界が一蓮托生になったという意味では、僕はグローバル化というのは悪くない点もあるのではないかと考えています。また、世界中で現在何が起こっていて、どのくらいの人が感染して、どういう時には感染が拡大し、どういう接触では感染しないとか、あるいは、1 回かかった人の免疫はどのくらいもつのかとか、そういういろいろなサーベイランスの情報、あるいは医療的な情報を共有するというパートナーシップが非常に大事だということが皆で実感できました。また、結局社会的弱者に感染症の悪影響も出がちであることが明瞭となり、SDGs の枠組みというのが COVID-19 に対しても非常に有効であるということがわかりました。先ほど SDGs の 2030 年までの達成というのは非常にチャレンジングになったという話は申し上げましたが、その方向は間違っていないということが、再確認されたのではないかという気が私はします。

渡辺

それは、世界共通に皆さんが認識したということですね。それも皆さんが、自分の生活を基盤としながら実感したということですよ。

今、先生がおっしゃったことの観点から見ると、科学や学術が非常に重要であることもわかってきたし、科学的に物事を考え、学術の観点から理解し、解析し、進めていくこともすごく大事だとわかったということですね。

沖

はい。実際に各国のロックダウンや日本のような自粛にしても、どのくらい接触を減らせればいいか、あるいは、どの期間、自粛しなければいけないかといったことが、それなりの医学的な感染症のモデル化と、それを支えるサーベイランス、何がどのくらい起こっているかという調査の結果に基づいているという意味で、COVID-19 は科学に基づく政策決定というのが前面に出たいい例ではないかと思っています。こうした科学に基づく政策決定で、一番これまで象徴的だったのは気候変動問題だと思いますが、気候変動に関しては、先日グローバルカーボンプロジェクトをリードしている研究者たちが、今回の COVID-19 のロックダウンや、あるいは旅行ができなくなったことによって、どのくらい世界中の二酸化炭素排出が減ったかという推計を出しました。

各国のピーク時には2割以上、減りました。ところが、4月に減ってからだんだん戻ってきてしまっていて、年間を通してみると4%から最大でも7%ぐらいしか去年に比べて減らないのではないかという推計値になっています。この7%を大きいと見るか、小さいと見るかですが、これだけ社会に影響を及ぼし、経済に大打撃を与えた中でようやく7%かということになると、がっかりする方もいるかと思います。ところが、もし全球平均気温の上昇量を1.5度以内に抑えようと思ったら、温室効果ガスの排出を2050年までにほぼ正味ゼロにしないといけないのです。そのためには、10年で半減、すなわち毎年約7%ずつ減らす必要があります。ちょうど今、見通されている今年の7%減を毎年やっていくということになりますから、私は逆に、単に飛行機に乗らないとか、車に乗らないといった我慢だけでは目標とする気候変動対策にならない、ということが理解できたのではないかと思っています。

やはり供給エネルギーの脱炭素化、再生可能エネルギー割合の増大や、エネルギー効率の飛躍的な向上とか、そういう抜本的な技術開発がない限りは、今想定しているような温暖化対策というのは無理だということが明らかになったという気がします。そういう意味では、産業界あるいは技術開発というのに、もっと加速的な取り組みが必要なのではないかなということもわかったと僕は思っています。

渡辺

なるほど。つまり、経済を縮小させて、皆が我慢するだけではなくて、むしろ積極的な開発をすることによって二酸化炭素を減らしていくことを本気でやらなくては行けないと、皆が実感した、この期間であるということですね。

沖

そうです。特に日本だと温暖化対策というと、我慢して、暑くてもクーラーを入れないだとか、あるいは、ちょっと大変でも歩いていくということが温暖化対策かのような取り上げられ方をしたこともあります。それだけではとても足りないのです。やはり抜本的な変化が必要です。でも、それは単に原始時代に戻るというわけではないとも思っています。今回の変化でも、ものすごく困っている人がいて、社会が不安定で、アメリカでは多分それが根本にあって、今、人種の問題でもものすごくもめるようになってしまっています。ですから、単に昔に戻るという変革ではなくて、皆が心豊かに生きられるけれども、出している温室効果ガスの量は少ないといった社会をつくるための技術が必要です。そしてそれが普及するような社会制度、仕組みなどが必要なのではないかと考えています。

渡辺

ありがとうございます。先生、今、日本の話が出ましたが、次に日本がどういう貢献を果たすべきか、ということをお伺いしたいと思います。例えばSDGsについて、私が世界のいろいろなアカデミーを訪問した経験からいうと、新興国はどこもSDGsにとても熱心なのですが、いわゆる先進国のアカデミーはあまりSDGsに熱心ではありませんでした。決して否定はしないし、協力はするという言い方はしますが、積極的に自分たちが学術の観点からSDGs達成のために何かをしようという話はあまり聞きませんでした。でも、日本は、学術会議も沖先生を中心にいろいろ考えていますし、学術会議だけではなくいろいろな研究者、それから学校教育、産業界、さまざまな分野でSDGsを達成しようとしています。日本は割と、皆で協力してどうにかSDGs達成に貢

献していこうとしています。こういう雰囲気があるのは先進国の中では珍しいのではないかと、私はそう捉えています。そういう観点で見た時に、日本がこれから SDGs を念頭におき、こういう感染症を経験したことから、未来に対してできることは何かありますでしょうか。

沖 日本は幸い感染者も死亡者の数も非常に、人口当たりでいうと少なくて済みそうです。少なくとも今のところは。それでも、経済的な影響を受けた方がたくさんいて、これがいずれ元に戻るのではなくて、割と多くの方がおっしゃっている通り、今までとは違う世の中になるということだと思います。それは、感染症を避けながらも、皆が豊かに暮らせる、それは例えば、こうしたリモートのコミュニケーションがもっと良くなるなどです。そうだとすると 5G への投資、通信インフラもソフトウェアも両方が必要でしょう。仕事はやはりすごく大事だと思うんですね。SDGs の 8 番、ディーセント・ワークですけれども、自分のやっている仕事に誇りを持てるような、そういう職を皆でつくっていくことが重要で、これは日本が牽引できるのではないのでしょうか。欧米、特にアメリカに比べると失業者はすごく少なくて、企業の皆さんが頑張っているからだと思いますが、それを単に我慢するのではなくて、次を見据えて新しい仕事、新しい職種をつくっていくということが必要だと思います。それは産業界、単に物づくりだけでなく、サービスを含めて新しく創っていくことです。そうした取り組みは、いろいろな国に広げていけるのではないかと思います。単に物づくり、あるいは製品開発だけではなくて新しい仕事づくりができるといいのではないかと僕は思いますけれど、どうでしょう。

渡辺 いいですね。単に新しい産業をつくるというよりも、新しい仕事をつくるということですね。新しい産業をつくるというのはいろいろところで聞きますが、やはり人々の生活には仕事大事だという感覚が私たちにはあるので、新しい仕事づくりというのは一人ひとりのことを考えている、そういう印象を持ちました。

沖 よかったです。

渡辺 沖先生、最後に質問したいのですが、SDGs は 2030 年の目標ですから、もう残り 10 年になってしまいました。その先、10 年の先の未来について、沖先生はどんな未来を描かれますか。

沖 SDGs には未達の目標が多分いっぱい出てしまうのはしかたないと思いますが、だからといって達成できそうな目標にするのではなく、最初から理想を掲げることは大事だと思います。例えば MDGs の反省は、半減すればいいという目標だと達成の可能性が高い人だけに注力して、残り半分の人是最初から放っていてもいいのではないかとような扱いがあったので、全ての人という目標が SDGs には多いのです。それが故に達成が難しいものもあると思います。しかも渡辺副会長ご存じのとおり、9 割を 95%にするなど、100%に近づくにつれてどんどん難しくなっていくわけです。今度は 95%を 96%にする、99.9%になったものを 99.99%にするというのは、もしかするとゼロを 90%にするよりも難しいかもしれないというように、どんどん難しくなるのは確かです。しかし、難しいからやらなくていいではなくて、いずれはそこにいこうと思って皆

が努力するという方向が定まっていることが大事だと思います。その目標に対して、SDGs ではこうやってみた、次は違う方向からやってみるか、いや、僕はこっちから挑戦してみるよ、といった、ゴール位置は動かさずに先を見据えておくということが非常に大事ではないかと考えています。

あとは、SDGs のその先になった時には、今は SDGs にはあまり入っていない音楽であったり、芸術だったり、あるいは踊り、そういう文化的なものが重要になるかもしれません。COVI-19 の自粛期間の中でそうした精神的文化的な活動は非常に大変な状況になっています。それらはもしかすると、毎日食べたり寝たりする、動物として死なないためには不要かもしれませんが、人として豊かに暮らすためには必要だと、皆が実感しているのではないのでしょうか。なので、文化的なものの価値を認めて、多様性を世界で広げていく。あるいは、いろいろな多様性を認め合って豊かな文化をつくっていく、そのようなのも SDGs の次には入るといいのではないかと僕は思っています。

渡辺

ゴールはあったほうがいいけれども、そのゴールに到達するにはいろいろなやり方があってよくて、いろいろな人がそれぞれ工夫しながら、いろいろなやり方をしながら未来をつくっていく、それが大事だと、私はそう沖先生のメッセージを理解しました。

もう一つとても心に残ったのは、沖先生が SDGs の「誰一人取り残さない」という理念、私はあの理念が特に多くの人の心に響いて SDGs に賛同する人が多いと思うのですが、沖先生が言われていることは、誰一人取り残したくないという意志から来ていると強く感じたことです。取り残されがちな人を大事に思いながら、その人たちのことを考えながら進んでいこうという意志が私にはとても伝わってきて、今日はとても大事なお話を伺えたと思います。どうもありがとうございました。

沖

ありがとうございました。

「ステイホーム」が示す「ライフ優先社会」2020/05/22 収録

対談者：落合 恵美子（日本学術会議連携会員（第20～22期会員）、京都大学大学院文学研究科教授、アジア親密圏／公共圏教育研究センター長、京都大学アジア研究教育ユニット長）

主催者：三成 美保（日本学術会議副会長、奈良女子大学副学長・教授）

（以下敬称略）

三成 皆さんこんにちは、日本学術会議副会長の三成と言います。今日は、京都大学教授の落合恵美子さんにお話を伺います。

落合さんは日本学術会議会員として長く活躍し、現在連携会員をつとめています。落合さんは日本を代表する社会学者としてご活躍なのですが、特に近代家族論の基礎を築き、日本におけるジェンダー研究の創始者の一人であって、現在はアジア全体を対象としたジェンダー研究をすすめておられます。

今日は家族社会学及びジェンダーの視点から行われた調査の結果をご紹介します。2030年の未来社会に向けたご提案をいただきます。

今ようやく緊急事態宣言が解かれはじめましたけれども、この3月から人々はテレワークや、ステイホームを強いられました。こうした「在宅勤務」に関する調査を企画した理由は何だったのでしょうか。

落合 全国一斉の休校が3月2日に決まりました。あのもう少し後に、ホームセンターとか美容院を休業するか随分議論しました。それに比べて全国一斉休校という本当に重要なことが何であんなにあっさり決ってしまったんだろう、というふうに驚きました。それから在宅勤務が始まって、海外からの帰国者の自宅隔離、PCR検査待ちの人はもちろん自宅にいます、検査の結果が陽性でも軽症であれば自宅療養というケースも随分ありました。ステイホームとか、おうちにいましょう、ということが本当によく言われるようになって、何でも「おうち」に押し込んでいく、というような対策が続きましたので、ちょっと心配になってきたんですね。こんなに何でもおうちにに入れてしまって、おうちの中はどうなっているのだろう、それで、家族の中でいったい何が起きているのか、これを明らかにしなければいけないと思って調査を企画しました。

三成 具体的にはどのような調査だったのでしょうか。

落合 対象は「自分もしくは同居家族が新型コロナの影響により、在宅勤務を経験した人」としました。4月8日～15日の間に、WEB調査の方法で実施しました。340人の方から回答をいただいて、その内、女性が6割、男性が4割でした。地理的には、首都圏と関西圏が中心になりました。回答者の3分の1は子どもが休校、休園中でしたので、大人も子どもも「ステイホーム」しているという、そういう実態が解明できる調査となりました。

三成 在宅勤務で困ったこととしてどのようなことが浮かび上がったのでしょうか。

落合 在宅勤務で困ったことというのは自由回答の方式で尋ねました。全体として皆さんが最も困っているのは、「仕事関係」ですね。それから運動不足など「生活習慣」があがっています。公園でジョギングしている人たちがニュースの映像で流れました。三密

だという批判があったのですが、皆さん健康問題に真剣に取り組んでいるということがよくわかります。批判ではなくて対策が必要なことだったんだ、というふうに受け止めないといけないと思います。

三成

男女でかなりの差がありますね。

落合

そうなんです。家事育児と家族関係については性別によって受け止め方が随分違います。「家事育児の負担が大きくなった」こと、それから「家族関係が悪くなった」と感じているのは女性の方に多いんです。男性はそうでもありません。

三成

女性もまた子どもがいるか、しかも子どもが休校中かどうかで、大きく違うように見えますが。

落合

子どものいる女性、特に休校中の子どものいる女性では、「家事育児」と「家族関係」で困っている割合が高くなります。自由回答では、「子どもの世話と子どもの勉強を見ることが増えたところに、仕事量は変わらないので、睡眠時間が激減した」といっている方がいます。それから、「保育園に預けられなくなったので家で夜間勤務になる」というように寝る時間を削ってやっと自分の仕事を片付けているという様子が見えてきます。これに対して在宅勤務の夫はどうしているのでしょうか。自由回答では、「夫も在宅していますが彼は自分の仕事部屋で集中できています。一方私の方は子どもの面倒を見ながらの仕事なので、まったく集中できずはかどりません。」というように夫婦ともに在宅勤務でも、「夫の仕事」を優先することになっているケースがかなりあるようです。

それで女性はイライラして、家族関係の悪化を感じているんですよね。でも、男性はあんまり感じていません。どうしてかなというと、女性が言っているのですが、「ギスギスするもつらいから」と我慢しているというんですね。都内のクリニックの院長をしている小野直美先生という方がいらっしゃるのですが、この小野先生が、家事育児負担の増加による心身のストレスで変調をきたした女性がクリニックにたくさんいらしているということを言ってらっしゃいます。

三成

在宅勤務になって良かったこともあったのでしょうか。

落合

今までお話ししてきたこととちょっと矛盾するようなんですけど、家族のいる人は、「家族関係が良くなった」と回答している人が圧倒的に多いんです。子どものいる女性では 38%、子どものいる男性では 47%が家族関係が良くなったと言っています。男性も女性も家族とすごす時間が増えた、家族との会話が増えたということを喜んでいます。ある男性はこう書いています。「夜の会食が無くなったので、毎日家族全員で食事をできるようになった。」これに対してある女性はこう書いています。「平日一緒にゆっくり食事をとれる。結婚して 20 数年来はじめてです。」ちょうど対応しているんですよね。これまで仕事と通勤に時間を取られてしまっていて、まともな家族生活が送れなかったということがここから見えてきます。でも、今回の在宅勤務の経験をしてみて、ワークライフバランスのとれた生活って楽しいなということに目覚めた、そういう様子がうかがえるように思います。

今まで働き方改革でワークライフバランスというのは随分強調されてきたんですけど、全然実現できませんでした。でも、ここへきて一気にそれが実現してしまっただけというふうなことであります。ある意味でコロナ危機は「未来」を連れてきたと言えるのではないのでしょうか。

三成 何か不思議ですね。困ったことで多くの人が家事育児の増加とか、あるいは家族関係をあげているのに、良かったことも家族、これはどのように考えたらよろしいのでしょうか。

落合 ここがこの調査の面白いところだと思うのです。回答者の内、女性の三人に一人、男性の四人に一人が、自分のする家事量が増加したと回答しています。実はこの人たちは、「家族関係」が良くなったと回答している割合も高いのです。男性も含めて、自分が時間をかけて家のことをした、そうしたら家族もみんな楽しそうにしている、そういう手応えを感じているんじゃないでしょうか。しかし、女性の場合はちょっと複雑です。自分の家事量が増加した女性は、「家族関係」が悪くなったと回答している割合も高いんですね。あまりに負担が多くて、しかも負担が偏っている、そういう場合は不満が溜まっているということでしょうか。

とはいえ、回答者の中には、家事分担について見直しができたといっている人たちもいます。ある女性はこう書いています。「家事育児負担が妻の私に集中している現状について、夫と深く話し合うことができた。今後の生き方を変えるきっかけになった。」今回の在宅勤務というのは、働き方や生き方、家族のあり方について、考え直してみる機会にもなったんじゃないでしょうか。

三成 今回のコロナ危機はもともと日本に存在していたけれど見えなかった問題、あるいは「隠されていた」問題をはっきりとあぶりだしました。では最後に 2030 年の未来社会に向けての落合さんのお考えを伺いたいと思います。政府は、この5月始めに「新しい生活様式」というのを提案しました。そこでは、例えばマスク着用であったり、三密回避であったり、通販の利用であったり、テレワーク、細々としたことがあげられています。でも、はっきりした理念、全体像というのが見えない。今回の新型コロナウイルスでですけども、100年前のスペインインフルエンザと同じように、おそらく今回の新型コロナも今後3年のうちに、第二波、第三波がある可能性がとても高い状況ですね。そういう中で、私たちが実践すべき「新しい生活様式」の核心は何だと考えますか。

落合 この「新しい生活様式」の核心ということですね。「ライフ優先の生き方」ということになると私は考えています。英語の「ライフ」という言葉に2つの意味が含まれています。「生命」と「生活」ですね。今緊急事態宣言が解除されるようになって、「生命を守ること」と「経済の維持」、そのどちらをたてるかというような言い方がされることがあります。なんかこれ変だと思いませんか。そもそも「経済」って何かということですよ。

三成 人があってこそその経済ですよ。

落合 GDPで示される経済成長率が落ち込んでいるとそれが今話題になっていますけれども、これを高くすることが自己目的というわけではありませんよね。今回のことで命あってこそだというふうによく多くの人が考えたと思います。人が生きること、つまり生活という